

まだ通がず。面容端正し。高き姓の人伉儷ふになほ辞びて年祀を経。爰に有人伉儷ひて怨々物を送る。彩帛三車なり。見て廻の心をもちて兼ねてまた近き親ぶ。語に隨ひて許可し、閨の裏に交通ぐ。其の夜闇の内に音有りて言はく「痛きかな」といふこと三遍なり。父母聞きて相談ひて曰はく「いまだ効はずして痛むなり」といひて、忍びてなほ寐。明日の曉に起き、家母戸を叩きて驚かし喚べども答へず。怪びて開き見れば、ただし頭と一の指とのみを遺し、自余はみな歎はる。父母見て、悚懼り惆悵て、婢女に送れる彩帛を睠れば、返りて畜の骨と成る。載せたる三の車は、また返りて呉朱曳木と成る。八方の人聞き、集り臨り見て、怪びずといふこと無し。韓宮に頭を入れ、初日朝に、三宝の前に置きて齋食をす。すなはち疑はくは、災の表まづ現れ、彼の歌は是れ表ならむ、と。或いは神しき怪なりと言ひ、或いは鬼の啖ふなりと言ふ。覆し思ふに、なほし是れ過去の怨なり。斯れまた奇異しき事なり。

孤の嬢女觀音の銅の像を憑敬ひて奇しき表を示し現報を得る縁 第三十四

詔樂の右京の殖櫻寺の辺の里に、一の孤の嬢有り。いまだ嫁はず、夫無し。姓名詳ならず。父母の有ける時には、多く饑にして財富み、數屋と倉とを作り、觀世音菩薩の銅の像一体を鑄奉る。高二尺五寸なり。隔家を仏の殿と成して彼の像を安き、之れを以ちて供養す。聖武天皇の御世に、父母命終り、哀び啼く。觀音菩薩の願ふ所を能く与へたまふことを耳聞き、其の銅の像の手に繩を繋けて牽き、花と香と燈とを供へ、用ちて福の分を願ひて曰さく「我はすなはち子にして、父母無し。孤にしてただし獨のみ居る。財を亡ひ家貧しくして身を存つに便無し。願はくは、我れに福を施へ。早く覗へ。急に施へ」とまうす。昼夜哭きて願ふ。里に富める者有り。妻死にて鰐なり。是の嬢壯強ひて入りて廳る。すなはち心に聽許し、壯と交る。明日終日に雨降りて止まず。雨に障へられて避らず。三日留る。夫の壯飢ゑて言はく「我れ飢う。り。ただし聽すやいなや」といふ。媒往きて告げ知らす。嬢なほし否辞ぶ。壯聞きて言はく「彼の身貧窮しくして衣服無きことは、我れ明に知る所なり。ただし聽すやいなや」といふ。媒往きて告げ知らす。嬢なほし否辞ぶ。壯強ひて入りて廳る。すなはち心に聽許し、壯と交る。明日終日に雨降りて止まず。雨に障へられて避らず。三日留る。夫の壯飢ゑて言はく「我れ飢う。

第三十四縁（あやしき表）の説話。善業についての現報説話。今昔物語集・十六ノ八に書承。
六死亡した当日を第一日として数えて第七日。死後四十九日至るまで七日ごとに仏事をおこない斎食することは、累七斎、斎七日などとよばれた。統紀・天平七年(皇基)十月五日条では三五ノ八余。(四別棟として建てられた家をいふか。今昔・五ノ一に「隔々細ニ造タリ」と云ふる隔と同じである。(五分散する。六中卷二十一縁。(七夫も「なし」。(八三尺は、唐大尺では約二九・八センチ、高麗尺では三五・一センチ余。(四別棟として建てられた家の夫の無い男。(五・中卷十六縁。

汝(な)も南无(な)や、仙(ひ)そ)积迦文(もさ), さかも酒(な)持(も)ち(汝(な)も)から同音の南无(な)がみちびかれ、南无から仙(ひ)そ)积迦文(もさ)が半尼(はん)佛(ぶつ)へと連想が展開し、さらに、积迦文から同音を共有する酒(な)持(も)ちがみちびき出されている。积迦牟尼を「积迦文」とする例は、たとえば妙法蓮華經・方便品をはじめ諸書にみえ、めずらしいものではない。元車に乗つて、山(さん)の知識(ちじき)、尼(あま)しに溢(あふ)る。「乗(のり)から同音の法(ほう)がみちびかれ、法申(のり)から山の知識(ちじき)、尼(あま)へと連想が展開し、さらには求める男の多さをいいうのである。(三)攻訛はじめ諸説は大理市庵治(わい)町とする。中世には城下(しろまち)郡、山辺(やまべ)郡、などの所属とされる。十市郡とあるのは誤りか。(三)城下郡に鏡作郷がある。この地にかかる一族であろう。(三)未詳。本説話以外に所伝をみない。『日本古代人名辞典』(鏡作造方)という項目をたてるが、「万之子」というのが女子の名、親の名は未詳。

飯を賜へ」といふ。妻言はく「今進らむ」といふ。竈に燃火を起して、空しき廬を居ゑ、頬を押して蹲る。空しき屋に入りて徘徊して大に嗟き、口を嗽き手を洒ひ、堂の内に参入りて像に繋けたる縄を引き、涕泣きて白して言さく

「恥を受けしむることなけれ。我れに急に財を施へ」とまうす。罷り出でて、先の如く空しき竈戸に向ひて頬を押して蹲る。爰に日の申時に急に門を叩きて人を喚ぶ。出でて見れば、隣の富める家の乳母有り。大櫃に百の味の飲食を具納れ、美き味芬馥しく、具らぬ物無くして、器はみな鉢と牒子となり。すなはち与へて言はく「客人有りと聞く。故に隣の大なる家具けて物を

進納る。ただし器は後に給へ」といふ。嬢大に歎び、幸の心に勝へず、著たる黒き衣を脱きて使に与へて言はく「物の獻るべき無し。ただし垢つける衣のみ有り。幸はくは受け用よ」といふ。使の母取りて著、急々に還り去ぬ。

食を以ちて夫に饗すれば、食を見て怪び、彼の食を見ずしてなほ妻の面を瞻る。明日夫去ぬ。絹十疋と米十俵とを以ちて、妻に送りて言はく「絹は廬に衣被に縫ひ、米は急に酒に作れ」といふ。嬢彼の富める家に往きて幸の心を述べて慶び貴ぶ。隣の家室曰はく「癡なる娘子かな。もし鬼託くや。我れは知らず」といふ。彼の使なほ言はく「我れまた知らず」といふ。嘖められて家に帰

り、常の如く礼まむとして堂に入りて見れば、使に著せたる黒き衣、銅の像に被る。爾うしてすなはち觀音の示す所なりと知る。因りて因果を信ひ、ますます感歎に彼の像を恭敬ふ。此れより以来、本の大なる富を得、飢を脱れて愁無し。夫妻天になること無く、命を全くし身を存つ。斯れ奇異しき事なり。

法師を打ちて現に悪しき病を得て死ぬる縁 第三十五

宇遜王は、天骨邪見にして三宝を信はず。聖武天皇の御世に、是の王縁ありて山背に徘徊る。八人從ひて奈良京に向ふ。時に下毛野寺の沙門諦鏡奈良京より山背に往き綴喜郡を歩く。師率に王に值ひて避け退く所無く、笠を傾け面を置して路の側に立つ。彼の王見て、馬を留め刑たしむ。師弟子と水田に入りて逃げ避れ走る。なほ強ひて追ひ打つ。師の負ひ持てる藏、みな撃たれて破れ損はる。時に法師呼びて曰はく「奚ぞ護法無からむ」といふ。王去ること遠からずして、其の路中に憲に重き病を受く。高き声をもちて叫び呻ひ、地を踊離ること一三尺ばかりなり。從者状を知りて法師を勧請ふ。師否びて受けず。三遍請ふれどもなほ終に受けず。問ひて曰はく「病むか」といふ。答へて

一本説話では、男が天と表現される時に女も妻と表現される。妻と表現される。

二 底本原文に「廬」。国会図書館本訓釈に「廬奈倍乎」、とある。しかし、「廬」も「なべ」も、水を加えて熱して煮炊きするための器であり、蒸

されたための器ではない。蒸すための器は「鍋」の異体字「醤」の誤認か。當時、飯は米を蒸してつくった。「鍋」音勝、古之政、炊く飯器也（和名抄）。三 頬杖をついて、頬を手で支えるのが頬杖、あごを手で支えるのがつら杖。四 原文繋像引縄。

五 わたしを取ずかしいめにあわせないほし。六 番の「廬」が登場している。本説話のばい、乳母であるこの意味があきらかではない。觀音が母に身を変していたとされるのは、觀音を女姿が描かれる。七午後三時から五時のころ。六 考えたか。觀音を美女として崇拝する傾向があるのだから、供物は主人公のささげたものではない。父母のささげたものであろう。上文には「乳母」が登場している。本説話のばい、乳母であることの意味があきらかではない。觀音が母に身を変していたとされるのは、觀音を女

のことを暗示するか。主人公は貧窮に苦しんでいない。父母のささげたものであろう。上文には「安・彼像・以・レ・供養」とあった。一中巻十四縁。

三 一俵の容量は不明。公私との運米は五斗を一俵とし三俵を一駄とした（延喜式・雜式）。

四 乳母。上文に使「使母」とあつた。

五 衣は、觀音の靈験の証拠となつている。

六 上文には「父母有時、多饋富財」とあつた。

七 若死にすることなく。

第三十五縁 宇遜王の病死を因果の理によつて説明する。宇遜王の病死を因縁の理によつて説明するためには隣家を訪れる、といふ説話展開が本来のかたちか。

二「疋は、布をはかる単位。絹一疋は、賦役令によれば長五丈一尺、幅一尺二寸。三一俵の容量は不明。公私との運米は五斗を一俵とし三俵を一駄とした（延喜式・雜式）。

三 鬼が憑いたのか。

四 乳母。上文に使「使母」とあつた。

五 衣は、觀音の靈験の証拠となつている。

六 上文には「父母有時、多饋富財」とあつた。

七 若死にすることなく。